

主日礼拝説教「反抗期のあなたへ」

日本基督教団石神井教会 2017年10月15日

【旧約聖書日課】ヨシュア記 6章12～20節

¹²翌朝、ヨシュアは早く起き、祭司たちは主の箱を担ぎ、¹³七人の祭司はそれぞれ雄羊の角笛を携え、それを吹き鳴らしながら主の箱の前を進んだ。武装兵は、更にその前衛として進み、また後衛として主の箱に従った。行進中、角笛は鳴り渡っていた。¹⁴彼らは二日目も、町を一度回って宿営に戻った。同じことを、彼らは六日間繰り返したが、¹⁵七日目は朝早く、夜明けとともに起き、同じようにして町を七度回った。町を七度回ったのはこの日だけであった。¹⁶七度目に、祭司が角笛を吹き鳴らすと、ヨシュアは民に命じた。

「閨の声をあげよ。主はあなたたちにこの町を与えられた。¹⁷町とそこにあるものは、ことごとく滅ぼし尽くして主にささげよ。ただし、遊女ラハブおよび彼女と一緒に家の中にいる者は皆、生かしておきなさい。我々が遣わした使いをかくまってくれたからである。¹⁸あなたたちはただ滅ぼし尽くすべきものを欲しがらないように気をつけ、滅ぼし尽くすべきものの一部でもかすめ取ってイスラエルの宿営全体を滅ぼすような不幸を招かないようにせよ。¹⁹金、銀、銅器、鉄器はすべて主にささげる聖なるものであるから、主の宝物倉に納めよ。」

²⁰角笛が鳴り渡ると、民は閨の声をあげた。民が角笛の音を聞いて、一斉に閨の声をあげると、城壁が崩れ落ち、民はそれぞれ、その場から町に突入し、この町を占領した。

【福音書日課】マタイによる福音書 21章18～32節

¹⁸朝早く、都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。¹⁹道端にいちじくの木があるのを見て、近寄られたが、葉のほかは何もなかった。そこで、「今から後いつまでも、お前には実がならないように」と言われると、いちじくの木はたちまち枯れてしまった。²⁰弟子たちはこれを見て驚き、「なぜ、たちまち枯れてしまったのですか」と言った。²¹イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば、いちじくの木に起こったようなことができるばかりでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言って、そのとおりになる。²²信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。」

²³イエスが神殿の境内に入って教えておられると、祭司長や民の長老たちが近寄って来て言った。「何の權威でこのようなことをしているのか。だれがその權威を与えたのか。」²⁴イエスはお答えになった。「では、わたしも一つ尋ねる。それに答えるなら、わたしも、何の權威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。²⁵ヨハネの洗礼はどこからのものだったか。天からのものか、それとも、人からのものか。」彼らは論じ合った。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と我々に言うだろう。²⁶『人からのものだ』と言えば、群衆が怖い。皆がヨハネを預言者と思っているから。」²⁷そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスも言われた。「それなら、何の權威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

²⁸「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行行って働きなさい』と言った。²⁹兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。³⁰弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、出かけなかった。³¹この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。」彼らが「兄の方です」と言うと、イエスは言われた。「はっきり言うておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。³²なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

信じて祈るならば…

先主日の「神学校日」に、わたしたちの教会は、すでに 60 歳代後半の神学生を奉仕者として迎えました。神学校を卒業するころには 70 歳を超えられていることでしょう。大きな決断をなさったのことだと思いますが、それ以上に、わたしたちに対する神の召し（召命）とはどういうものか、ということを変更して考えさせられたのではないのでしょうか。先主日の福音書日課の御言葉は「ぶどう園の労働者のたとえ」でしたが、ぶどう園の働き人として朝早くに雇われた者も、夕方遅くに雇われた者も、同じように報酬を与えられるのが天の国、天の父の御心であるということが告げられていたのは、決して偶然のことではないでしょう。

その神学生が説教を語り始めた時刻に、この礼拝堂で携帯電話の呼び出し音がしばらく鳴り続けました。礼拝中に携帯電話の呼び出し音が鳴るなんて、と気に障られた方もあるかもしれませんが、しかし、それは、わたしたち教会共同体全体に対する呼び出し、神の召しであったかもしれません。わたしたち教会において「神の家族」とされた一人の姉妹が、そのとき、地上での最後の息を引き取られたという連絡であったからです。教会員の皆さんはご存じのとおり、木曜日にこの礼拝堂で葬送の式を執り行いました。神は、一人の姉妹の死を通して、わたしたち教会の群れに対して、また新たに、一つの呼びかけをなさった。何らかの神の御業の働きへと、わたしたち個々にはなく、一つの群れとして、共同体として、呼び出された。共同の礼拝のただ中であの呼び出しが起こったというのは、そういうことなのではないかと、わたしは思わざるを得ないのです。

旧約聖書日課には、モーセに率いられてエジプトから出て来て 40 年、荒れ野の旅を経て、いよいよ神の約束くださった地に入っていくイスラエルの民が、モーセの後継者ヨシュアの指導の下、約束の地の最初の占領地、エリコの町を攻略する場面の終わりが語られていました。このとき、神は、ただイスラエルの民を約束の地に安住させることだけをお考えになられていたわけではありません。イスラエルの民が約束の地を得させられることを通して、神は、ご自身のことを、イスラエルの人々に対して、またイスラエルの周囲の人々に対して、はっきりとお示しになろうとされていた、というのです。そこで、エリコ攻略も、ただイスラエルの軍隊に正攻法で攻めさせるのではなく、まず武力を使わず、祭司たちが「主の箱」を担いで角笛を吹き鳴らしながら町の周りをグルグルと回るだけ、ということをお繰り返させたのです。「主の箱」は神のお授けくださった十戒の石の板やマナの壺、そしてモーセの杖が納められていた箱です。それを示しながら、七日に渡ってエリコの町の周りを行進して、その後、角笛の合図と共に一斉に闐の声をあげると、不思議なことに町の城壁が崩れ落ち、イスラエルの軍勢は難なくエリコを攻略することになった、というのです。

この七日の行進は、イスラエルの人々が神の御業の始められるのを待って、祈りを一つにしていく営みにもなったのでしょうか。聖書が語るのは、そのように祈りを一つにして、示された神の御業の働きに向かって行く信仰共同体です。わたしたちの信仰とは、そのような共同体に加わることと不可分だと教えるのです。

天からのものか、人からのものか

このエリコ攻略の物語の中に、ラハブという遊女の名前が出てきます。ヘブライ人への手紙(11:31)にも取り上げられている女性です。ヨシュアは、エリコ攻略に先立って、二人の斥候を派遣しましたが、その斥候が滞在したのがラハブの家でした。そして、当局の不審者捜索が行われたときには、彼女が彼ら斥候をかくまって助けたのです。ラハブは、エリコの町の他の人々と比べて信仰深かったとか、イスラエルの神を信じていたとか、そういうことではなかったのですが、ただ、この斥候二人を助けたことのゆえに、エリコの町がイスラエルに占領されたとき、家族そろって命を救われた、と物語られているのです。

このラハブの逸話は、エリコ攻略物語の中では、必ずしも不可欠なものではありません。にもかかわらず、聖書は、この逸話を加え、また後の時代まで語り継いだのです。しかも、ヘブライ人への手紙は、このラハブの救われたのは、彼女が「信仰によって」行動したからだとさえ、語っているのです。しかし、それは一体、どのような「信仰」なのでしょう。ヨシュア記でラハブについて物語られていることは(2章)、二人の斥候との関りだけなのです。そこに、どのような「信仰」が語られているのでしょうか。

福音書日課で、主イエスが祭司長や長老たちに対して、「**ヨハネの洗礼はどこからのものだったか。天からのものか、それとも、人からのものか**」と問われていました。洗礼者ヨハネは神から遣わされた預言者だと、多くの人が考えていました。ヨハネは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」(3:2)と宣べて、悔い改めに導く洗礼を授けていたのです。主イエスの宣教活動も、そのヨハネを受け継いだ側面が強かったのです。主イエスは、今日の箇所終わりの方で、「**ヨハネが来て義の道を示した**」と言われていますが、主イエスもまた、義の道をお示しになられたのでした。山上の説教の初めで、主イエスは、「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」(5:20)とおっしゃられていたのを、思い起こすことができます。そのようにして主イエスが示された義の道とは、もちろん、神との関係を正すことでもありましたが、それ以上に、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(5:44)との教えに代表されるように、わたしたち人間同士の間関係を正すことでもありました。

「天からのものか、人からのものか」と問われたとき、主イエスは、(権威の源泉ではなく)そのような人間同士の関係をも正していく義の道が、どこから得られるのか、ということをお示しになられていたのでしょうか。もちろん、「天からのもの」によってです。「人から神へ」という方向のものではなく、「神から人へ」という方向です。天の父の御心を知り、それをわたし人間同士のこととして行うという道筋です。天の父がわたしたちになさってくださいるように、わたしたちも互いにそのようにする。それが主イエスのお教えになられる「信仰」のあり方です。聖書全体が教えることです。端的に言えば、「信仰」は、「信頼」関係であり、「信義」の関係であり、互いに対する「誠実さ」のことなのです。

後で考え直して

無論、わたしたちは、神の御心がどのようなものかを繰り返し聞いていても、それを十分に受けとめ、自分の行動や振る舞いとして結実させているとは、言えないかもしれません。本当であれば、わたしたちは皆、すでにキリストに似た者としてここにいるはずなのです。けれども、とても恥ずかしくてそんなことを言えない。そればかりか、聖書を読み、神の御言葉を聞き、主イエスの教えに耳を傾けながら、それを信頼して素直に受け取ろうとせずに、信義に反して自分の考えで修正しようとしてしまう、不誠実な者なのではないでしょうか。

主イエスは、そのようなわたしたちに対して、「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(18:3)とおっしゃられました。それは、子どもや幼子が純粹無垢だとか、そういう心持になれば、ということではないでしょう。子どもでも幼子でも、人間は、決して純粹でも無垢でもありません。自己中心的な罪人です。ただ、子どもや幼子は、親や大人の命じる言葉に従うしかないので。親の言葉の中で生きるしかないので。口答えしては、生きていくことができなくなってしまうのです。

ただ、主イエスは、わたしたちがそう簡単に子どものようになることができるとはお考えでもなかったと思います。反抗期があるのです。親に対する反抗期があるように、神に対しても反抗期がある。きちんと反抗期を経なければ、本当には成熟した人間になれないのです。人としても、信仰者としても。今まさに。主イエスは、そのことを、よくご存じだったので。いいえ、もしかすると、主イエスこそ神に対する激しい反抗期を経てこられたのではないのでしょうか。

「二人の息子のたとえ」を語られた主イエスは、ここで、もちろん、一つには、議論の相手である祭司長や長老たちと、ご自分が招き集めていらした徴税人や娼婦らとを比較するために、これを語られたのです。でも、もう一つ、ここに描かれている「兄」息子は、わたしには、主イエスご自身の姿も投影されているように思えます。聖書の物語では、たいてい「弟」が主役になるのですが、このたとえは「兄」が主役です。そして、主イエスも「長兄」でした。わたしたち信仰者の「神の家族」が互いを兄弟姉妹と呼び合うときにも、主イエスは「長兄」なのです。その「兄」が、神のお命じになられたことに、一度は「いやです」と拒まれた。たしかに、主イエスは、最後の晩にも、祈りの場で、「この杯を…過ぎ去らせてください」(26:39)と神に願われたのです。「いやです」と言われたのです。しかし、考え直したのです。「御心のままに」と考え直したのです。間違いなく、そのような葛藤が、主イエスにもおありだったのです。

わたしたちは、これでも、主イエスと共に「神のぶどう園」の働き人として、呼び出されてきた者です。「はい」と答えることも、「いやです」と答えることもできます。どう答えるとしても、最後には「神のぶどう園」に出かけて行って、御心を行うことを、神はわたしたちに望まれているのです。この世界が、「神のぶどう園」として、御心を行う働き人で満たされる日が訪れることを、神はお望みで、反抗期のわたしたちを働き人として召し、また遣わしてくださるのです。